

安堵の墓石

松下由梨亜

孤独の墓石にひそむ階段を下りて

わたしのなかにひろがる宇宙は

どこまでもきらめいている

口にふくんだ墓石は

石くれの形をして

ときの不可逆性を

抱擁無限の安堵にかえて

あなたに届けてくれるだろうか

わたしには くちびるがある

墓石を食んで

あなたを想い続けているの

きみは燃えさかる石炭のような幼さで

どこまでも熱を移そうとする

わたしに口づけを強要する

二十億光年先で 眼があうと

すべての移ろいゆくものは

永遠なるものの比喩となり

石くれほどの重みをもって

ときのふくらむ不可逆性に

やわらかく押しつける

思いがけないやさしさが
なによりも
嬉しい